

新年早々マレーシアとシンガポールに出張した。目的はマレーシアのレアアース工場の見学と、シンガポールの現地法人の新年会である。マレーシアのペナン島にある得意先の工場にも新年の挨拶に行った。

ついでにペナンの有名なプラナカン博物館も見学した。プラナカン博物館は福建華僑の大富豪チェン・ケンキー氏の豪華な大邸宅の跡である。1786年以降のペナンは英国の占領時代になり、東西の絢爛豪華な文化が混ざり合い不思議な異空間都市となった。博物館にはベネチアンガラスやペルシャの絨毯、伊万里や有田の陶器、そして中国の清代の仏像や書画などあらゆる芸術品がところ狭しと飾られているのだ。

プラナカンとは15世紀後半から移住してきた中華系移民の末裔のことである。福建華僑が多いのだが、当時は英国やオランダの占領下だったマレーシアやインドネシアに溶け込んだ人々である。彼らは4世代にわたってペナンやマラッカ海峡やシンガポールの英国植民地において英語、北京語、福建語、マレー語を使いこなして経済的な自立を果たし大成功を収めた結果、プラナカン文化を今日に残したのである。

さて、日本人として私がこのプラナカン文化を見ていて感じることは、なぜ日本人の昔の移住者がこの東南アジアで日本人町まで作りながら歴史の中に埋没してしまっただのかという疑問である。

13世紀から16世紀にかけて活躍した倭寇

## AROUND THE WORLD

山師の手帳 第27回 中村繁夫

### ペナンのプラナカン文化に見るハイブリッド



は、東アジアや東南アジア地域において海賊行為や密貿易を行った日本の貿易商人のことである。ポルトガルや英国やオランダがこの地域を支配するずっと以前から日本の倭寇は活躍していたのである。

東南アジアで隆盛を極めたアユタヤの日本人町の歴史は16世紀ごろから始まった。関ヶ原の合戦以降にタイのアユタヤ王国が日本の侍を傭兵として雇ったので、一時期は日本人が3000人までにも増加した。その中心的人物が山田長政である。1630年ごろには山田長政の勢力を恐れたためにアユタヤ王国は山田長政を暗殺し、そのあとは勢力が一気に衰えてしまった。

「からゆきさん」の歴史はずっと後になるが、19世紀後半に東アジア・東南アジアに渡って、娼婦として働いた日本人女性の数である。ところが日本の国勢が盛んになるにつれて、彼女らの存在は「国家の恥」であるとして国内で非難され、1920年の廃娼令とともに海外における日本人娼館も廃止され多くが日本に帰った。

明治から大正にかけてその数は20万人ともいわれているが、現地に根付くということは当然なかった。

なぜプラナカン文化を中国の華僑たちは維持し、また今も発展させることができてくるのかについて考えてみたい。彼らは祖

国を追われ、新天地を求めて東南アジアに根を張ろうとした。華僑たちは交易を通じて視野が広くなり、人脈を大切にすることから更に活躍の場は広がっていった。東西文化の良さを取り入れて独自の文化を守りながら多様性を追求していったのである。何よりもコミュニケーション能力を磨き、プラス思考で東西経済圏のパイ役になろうとした。

当然ながらこれらプラナカンの中にも成功者と脱落者はいたと思う。格差社会は昔もあつたはずだが、その競争社会の中でサバイブした者たちだけがプラナカン文化を創ったのだろう。当社のシンガポール法人の総務部長は日本人女性であるが、彼女の旦那さんは典型的なシンガポールのプラナカンで、会社設立時から無償で貴重なアドバイスを頂いている。驚くことは彼の人脉とコミュニケーション能力の高さで、それに加えて行動力も半端ではないのだ。

生物学的に掛け合わせた第一世代をハイブリッドと呼ぶが、彼らの異種交配種が次々に優秀な人々を産み、今日の生物多様性の強みを担っているのかもしれない。



〔なかむら・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンストマテリアルジャパン（AMJ）社長。新著に『レアメタルハンター・中村繁夫のあなたの仕事を成功に導く「山師の兵法A to Z」』（ウェッジ）。